

〔課題演習報告〕

社会的な見方や考え方を成長させる社会科学習指導法の研究  
—グループによる共創的対話活動を通して—

Teaching Method of Social Studies for Developing Social Viewpoint and Way of Thinking  
- Co-creation Dialogue Activities by Group -

井上 聖也

Seiya INOUE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

(2015年1月6日 受理)

本研究は、中学校社会科授業において、多田(2009)が述べる共創型対話を取り入れた活動を単元全体で考え、社会的な見方や考え方を成長させることを試みる。共創型対話とは、様々な意見を持つ人が意見をそれぞれ出し合い、考え方や解決法を共に創るという活動である。従来考えられていた共創型対話は単元末の1時間に設定されている。本研究での共創的対話活動は、単元を通じた課題意識を設定し、個人の意見形成を充実させ、グループによる共創型対話を行うという一連の活動に焦点を置くこととし実践した。実践結果では、社会的な事象を様々な視点から多面的にとらえることができ、社会的な見方や考え方が成長する個人の意見形成やグループによる交流活動の場面で見られた。同時に、学習意欲が向上し、グループの人間関係が高まるという示唆を得た。

キーワード：社会的な見方や考え方、共創的対話活動、共創型対話、グループ学習

## 1 はじめに

近年の情報化やグローバル化などの急激な社会変化において、社会的な事象がより複雑に絡み合うようになった。それらの多くは一概には解決できない問題ばかりであるため、それらの問題を多面的・多角的に考察し、相手の立場を尊重しながら解決の糸口を探る姿勢が必要である。これらの姿勢の基礎を義務教育段階で養うべく、中学校社会科では、社会的な事象をあらゆる角度から多面的・多角的に考察し、問題解決や真実に迫るような実践が行われている。

一方、中学校社会科は、子どもたちから暗記科目と捉えられがちで、子どもは社会的な事象を面的でしか捉えていない現状がある。安井(1985)は、教師から教わった社会的な事象などをただ暗記するといった受動的で深みのない子どもたちの学びが、結果的に、「おもしろさ」を見いだせず、社会科嫌いの子どもの数を育てていると指摘している。

そこで、吉本(1985)は、学習を能動的な知的行為へと導くために、グループ学習を取り入れることを述べている。少人数になり、一人ひとりの発言する機会が増えることで、子どもたちが相互誘発され、思考が多様で豊かなものになるという教育効果が期待されると述べている。しかし、現在、一時期盛んに行われていたグループ学習があまり実践に取り入れられていない現状もある。理由として、子どもの中の力関係により、個性的な意見が埋没し、意見が統一的になりやすいという指摘や子どもが他者に依存するようになり、主体的に学習へ参加できないという指摘もされ、グループの機能が十分に発揮できないためである。

深澤(2006)は、グループ学習については、1980年代までは、子どもたちの生活の中に、集団のなかで相談したり合意したりする経験やモデルが存在していたため、日常生活の子どもたちの「かわり合い」が授業の中でも生きていたと述べている。けれども、現代では、少子化、核家族化、地域関係の希薄化や情報通信の高度化など子どもを

取り巻く環境の変化により、子どもの「かかわり合い」が変化してきたことを指摘している。

安野(2005)は、今、社会生活において求められるのは、協働思考を伴う集団的かつ創造的な問題解決である。集団で協働して理性的・論理的・系統的に問題に対処する協働思考(コラボレーティブ・シンキング)を伴う問題解決は、今日における社会問題の解決のために必要な能力であると述べている。

このことから、社会科という教科を通して習得させる必要があると考える。

## 2 研究の目的と方法

### (1)研究の目的

本研究では、多様な他者と英知を出し合って語り合うことにより、新たな知見や結論などを創生させ、互いに創造的な関係を構築していく共創型対話を単元全体で考える。そのために単元を通じた学習課題を設定し、社会的な見方や考え方を成長させるようなグループによる共創的対話活動を取り入れた社会科学学習指導法を究明する。また、同時に子ども同士の間関係力を成長させていく学習指導法を明らかにする。

### (2)研究の方法

- ①理論研究を行い、社会的な見方や考え方とは何か、身につけさせるべき視点はどのようなものなのか、そしてどのように成長させるのかを先行研究から明らかにする。
- ②共創的対話活動を定義付けするために、先行研究をもとに授業モデルを作成する。
- ③その授業モデルをもとに共創的対話活動を導入した授業実践を行い、生徒の社会的な見方や考え方を成長させていくことを目指し、その有効性を調査する。

## 3 先行研究

### (1)「社会的な見方や考え方を成長させる」とは

北(2012)は、「見方」を「見る方法」、「考え方」を「考えるときの仕方」としている。社会科では、学習を通して、社会に対してどのような方法で見たり考えたりするのか学ぶことができ、ここで言う方法とは、ものを見る立場や観点であり、視点、視座と言い換えることもできると述べている。また、北は、社会科で身につけさせるべき見方・考え方について、8つの視点を述べている。

表1 社会的な見方や考え方の視点

視点	視点の具体化
不易と流行	社会には変化していないものと変化しているものがあるという見方や考え方。特に社会的事象を時間軸で見るときに留意したい見方や考え方。
全体と部分	常に全体のなかでの位置づけや位置関係を意識する見方や考え方。
原因と結果	どうしてそのような結果になったのかを明らかにするような見方や考え方。原因や理由、背景などを検討することによって教訓を引き出すことができる。
空間軸と時間軸	空間軸とは地理的な見方や考え方。時間軸とは歴史的な見方や考え方。
継承と創造	過去を受け継ぎ、新たなものを創り出すという見方や考え方。
公正さ	正しい判断や行動ができるようという見方や考え方。特に人や事象に対する差別意識や偏見を持つことがないように留意する。
未来予測	これからの社会に対して予測する見方や考え方。具体的には、これからの自らの生き方を表明したり、社会に対する願いを発信したりすること。
事象の限界性	「これまで調べたことから言えること」といった、限界性を意識した見方や考え方。新たな社会的事象を調べたり、社会が変化したりすることによって、それまでの見方や考え方が変わりうることを意味している。

岡崎(2013)は、社会的見方とは、数多くの具体的事実に支えられた関連づけられた概念であるとし、人間の持っている価値観というものは、概念に基づいている。(中略)この「価値」が、社会的な考え方であると述べている。また、岡崎は、社会的見方は、数多くの具体的事実に支えられており、多くの他者に共有してもらえらる社会的見方に基づいて、社会的考え方が成り立つと述べている。

よって、本研究における社会的な見方や考え方を成長させるとは、社会的な8つの視点を踏まえた、知識・概念や価値を数多く獲得する「拡がり」と、概念をもとに価値をもつ「深まり」の両方の視点に着目することで、社会的な見方や考え方を成長させていくと考える。

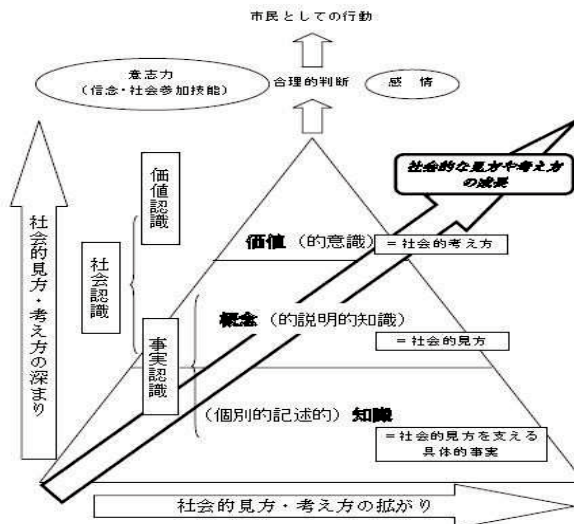


図1 社会的な見方や考え方の成長  
(岡崎 2013 を一部引用して筆者が作成)

## (2) 共創型対話とは

共創について、三宅(2004)は、多様な、異なる背景を持つ人々が「場」を共有しながら、持続的な創造活動を実践することと述べている。多田(2009)は、さまざまな意見を出し合い、新たな考え方や解決法を共に創ることとしている。安野(2005)は、他者が、それぞれ自分の持てる個性と能力をフルに発揮し、チームワークによって行われる創出のこととしている。

そこで、本研究では、共創とは、様々な意見を持つ人が、意見をそれぞれ出し合い、考え方や解決法を共に創ることとする。

多田(2009)は、対話には4つの型があるとしている。「指示伝達型」、「真理追求型」、「対応型」、「共創型対話」である。共創型対話の特徴は、わかり合えないかもしれない者同士が、互いに意見や感想を何とか伝えようとするための相互行為であり、その行為の継続により、多様な英知の交流が、一人では到達し得なかった高みに至ることができる点である。率直に意見を出し合うので、対立が起こり、異見が出され、必ずしも合意形成ができないこともあるが、大切にされていることとして、対話の過程で相互理解・信頼が深まり、良好な人間関係を形成していこうとする姿勢を共有することとされている。共創型対話を行うことで、社会科の社会的事象や学習内容を多面的・多角的な考察へとつなげ、子どもの社会的な見方や考え方を成長させることができると考える。また、子どもの人間関係の改善につながると考えられる。

金子(2008)は、グループ学習が成立しない理由として、子どもたちが、親密圏から公共圏に越境できない問題を指摘している。

親密圏とは、自分の発言が想定内で受け取られる領域であり、話題、話し方やテンション、符牒や仕草が共有された、同質な者の閉じた関係である。親密圏がつくりだす、馴れ合いの関係は、授業で発言することに「恥ずかしさ」という感情を引き起こし、個性的な意見が埋没する。そのような関係でなければ、排除される恐れがある。授業での親密圏は、今日のグループの姿だと言える。

公共圏とは、お互いに異質性と差異がある関係である。しかし、それにも関わらず、互いに認め合う関係でもある。この関係は、発言が異なっても、微妙に重なりあい、せめぎあいつつ成立していく。こうした公共圏に子どもたちがいるのであれば、お互いの異質性と差異を認め合い、共創型対話や活動が成立するための学習規律を、自分たちの手でつくり出すことができると考える。共創的対話活動を行うために、子どもたちを公共圏へと越境させた状態にさせなければならないと考える。共通の課題意識を持ち、一人ひとりが異なる意見を形成し、それらを持ち寄って互いに尊重し合いながら共創型対話をすることは、生徒たちが公共圏へ越境できた状態であり、人間関係によるグループの問題を解消した状態であると考えられる。

よって、グループによる共創型対話は、生徒の社会的な見方や考え方を成長させるとともに、社会的な事象への関心を高めることができる。また、友達の新しい一面や考え方を知ることができ、親密圏を越境した公共圏へと導かれるという人間関係面の問題にも大きく影響すると考えられる。

平成 24 年度研究紀要福岡教育大学附属久留米中学校(28～33 頁)では、共創型対話が行われている実践が行われている。

そこでは、単元末の1時間の「関連付け」を行う場面で導入され、自分の考えを見直したり、他者のよさを見いだしたりすることができるようにしている。

本研究は、単元末1時間の共創型対話に加えて、単元全体で共創型対話に至る過程を重視して、グループでの共創型対話を有意義なものにするために、単元レベルで活動を構成し、個人思考意見形成、グループによる共創型対話に着眼点を置いた共創的対話活動を行わせることとした。

## (3) 共創的対話活動とは

共創的対話活動とは、単元を通じた学習課題を設定し、個人の意見形成ができるような手だてを行ったり、対話する際に必要な視点を育んだりしながら、課題解決のためのグループによる共創型対話を行うといった一連の活動である。共創的対

話活動の例として、公民的分野単元「現代社会をとらえる見方や考え方」で具体的に説明する。単元の学習課題は次の通りである。

○学習課題			
グラウンドを使用する部活動は3つあり、それぞれサッカー部、ソフトボール部、陸上部である。			
そのような中、急遽1週間後の水曜日に体育館の耐震工事が始まることになった。しかし、その日は大会3日前で各部活は、大会を意識した練習を考えていた。そこで、3日間のグラウンドをどのように使用するか各部活で話し合いをすることになった。			

#### 部活動のグラウンドの使用面積・人数・成績

部活動名	サッカー	ソフトボール	陸上
使用面積	全面	2/3	2/3
人数	50人	12人	20人
成績	地区大会	全国大会	地区大会

この学習課題設定後、以下の過程の通りで授業実践を行う。

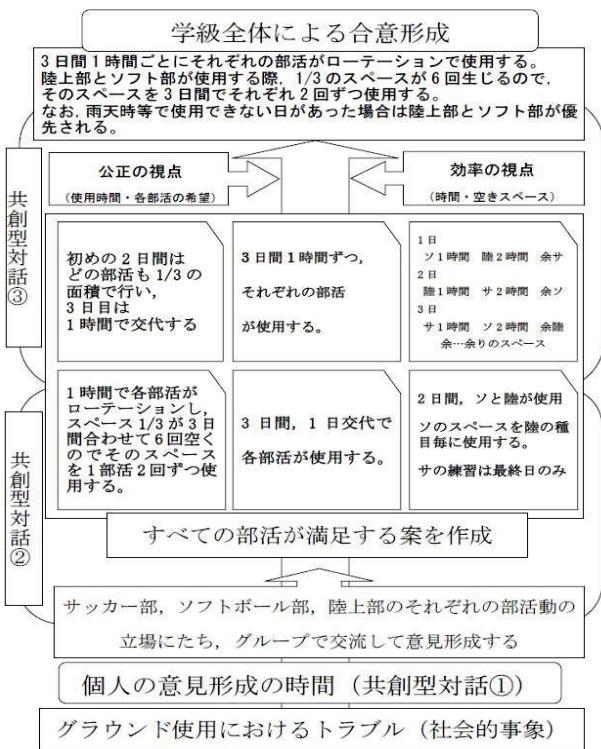


図2 共創的対話活動の流れ

個人の意見形成の時間では、意見形成できる生徒とできない生徒の差があったために、同じ部活動の立場の生徒が集まり、個人の意見形成(ジグソー学習)を図った(共創的対話①)。特に、陸上部の立場にたった生徒は、特徴が見いだせず、自分の意見に自信が持てない生徒や意見形成ができない生徒がいた。ジグソー学習にすることで、フィールド競技の存在など、一人では気づくことができなかった視点に気づく場面もあり、社会的な見方

や考え方が広がったのではないかと考える。

その後、グループ(6人)による意見交流を行わせ、よりよい意見となるように各グループで意見形成をさせた(共創的対話②)。その際、他の部活動の主張を聞く中で、自分の部活動の見方や考え方が広がったり、深まったりすることができたのではないかと考える。

共創的対話③では、各グループで作成した意見を公正と効率の視点から吟味し、補足部分などを補いながら、学級で一つの意見を作成させた。特に、「雨天時等で使用できない日があった場合は陸上部とソフト部が優先される」という意見は、決して到達できなかった意見である。このように共創的対話①・②・③を通して、社会的な見方や考え方を成長させていく。

社会的な見方や考え方を成長させる共創的対話活動の研究構想図は以下の通りである。

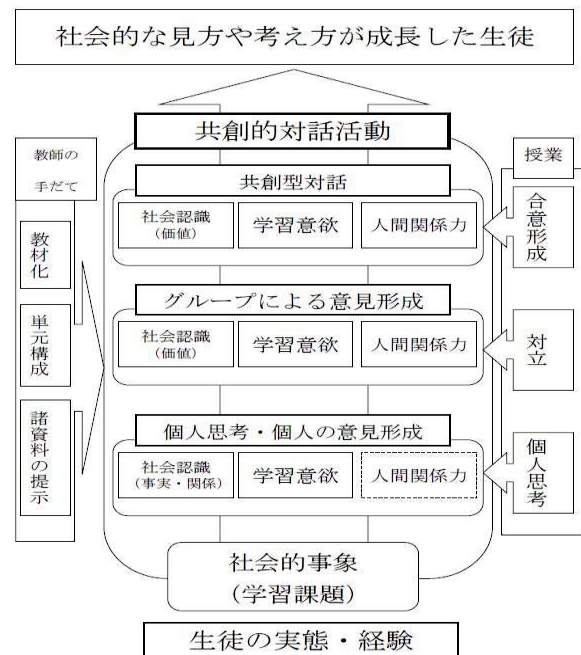


図3 研究構想図

#### 4 実践を踏まえた提案

- (1) 単元名 第3学年 公民的分野  
「くらしを支える地方自治」
- (2) 実施時期 平成26年11月～12月
- (3) 単元の目標及び単元構成  
＜単元の目標＞
  - ① 福津市への10代の声としての提案に関心を持ち、個人の意見やグループでの意見を作成しようとする。
  - ② 緊急性や実現性、公共性、環境面や財政面などの視点を取り入れ、多面的・多角的に考察し、

10代の声を作成することができる。

- ③10代の声を作成するために、福津市の議会の資料や財政のグラフから、福津市の仕組みや課題について読み取ることができる。
- ④福津市の議会、選挙、行政の仕組み、財政の状況や住民の権利などについて理解することができる。

< 単元構成 >

配時	学習活動	共創的対話活動
1 ・ 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業前アンケートをもとに自分たちが感じる福津市の課題や求めることを共有し、福津市長に10代の声を提案するという学習目標を立てる</li> <li>・福津市の議会、選挙、行政の仕組みや福津市の財政状況を調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福津市長に10代の声を提案するという学習目標を立てる</li> <li>・共創的対話に必要な議会の仕組みや財政状況などの資料を調べる</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民の権利について理解し、住民として街づくりに参加していくことや、10代の声の重要性を確認する</li> <li>・個人で10代の声を作成した後、グループで交流を行い、意見を作成する。その際、意見を絞った視点を明確にしておく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で10代の声を作成する(共創型対話①)</li> <li>・作成意見をもとに、グループで共創型対話を行う(共創型対話②)</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級全体で視点を共有した後、各グループで発表する</li> <li>・9つの意見からグループで話し合っ2つに絞り、学級での10代の声を作成する</li> <li>・福津市長が納得できる理由を個人で考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級での10代の声を、グループで視点を共有しながら2つに絞る(共創型対話③)</li> </ul>

(4) 授業の実際

【 第1・2時 学習課題の設定と視点づくり 】

第1時の導入では、福津市の課題と福津市に求めることについてのアンケート結果2項目を電子モニターで提示した。福津市の課題では、道路工事の多さや騒音の問題、海の汚さやポイ捨てなどの環境問題であった。福津市に求めることでは、古賀市と合併や地域活性化、道路工事を早く終わらせてほしい、騒いでも怒られない広場をつくってほしいなどの意見があった。また、ゆるキャラで町おこしをした例や、北九州市戸畑区の新旧図書館、宮城県岩沼市などの住民の声が街づくりに反映されている例も提示した。その後、自分たち

の課題や求めることを福津市長に10代の声を届けようという単元を通しての学習課題を設定した。そして、その10代の声は、誰が、どこで、どのようにして採用するのかという課題意識から、議会だよりを各グループに配布し、グループで共有しながら、地方公共団体の選挙や議会の仕組みについて学習した。

第2時では、意見形成をさせるための視点づくりとして、2つの視点を学習した。1点目は、福津市ができる仕事の範囲である。生徒の事前アンケートでは「学校にクーラーをつけてほしい」「図書館の中で自習できるスペースを作ってほしい」といった市町村レベルで対応可能な意見もあれば、「ユニバーサルスタジオジャパンを作ってほしい」「古賀市と合併してほしい」というような対応し難い意見もあった。そこで、国できる仕事の範囲と都道府県できる仕事の範囲を比較させたり、グループ分けをさせたりして、福津市ができる仕事の範囲を理解させた。

2つ目の視点は、福津市の財政状況である。財政の仕組みが分かる資料(市政だより)を生徒に配布し、平成25年度の福津市の歳入と歳出と全国の地方公共団体の歳入と歳出の額やその構成について比較させた。また、福津市の平成25年度に行った主な事業を調べさせ、財政状況の視点から共創型対話ができるようにした。福津市の財政状況を調べることで、生徒の身近な場面で市のお金が使われていることを実感させた。

【 第3時 共創型対話①② 】

授業の前半15分で住民の権利について学習をした。その後、個人思考の時間を10分間取り、意見形成をさせた(共創型対話①)。その際、意見形成の参考にするために「〇〇中学校3年生の声と住民の声一覧」という資料を配布した。そこで形成された意見は次の通りである。

表2 共創型対話①で形成した10代の声

<ul style="list-style-type: none"> <li>・海をきれいにしてほしい。テレビで紹介されるほどのおしゃれな店があるのもったいない</li> <li>・塾の帰りの街灯がないので、夜道が怖い</li> <li>・駅の近くの有料駐輪場を前のように無料駐輪場にしてほしい</li> <li>・ほとんどの公園で禁止されているサッカーや野球ができる公園をつくってほしい。大人は『外で体を動かせ』と言うけど、ブランコしかないで体を動かせない</li> <li>・福津市の伝統的な場所(宮地嶽神社・遺跡)を他県に向けてPRして、観光客を呼びこむ</li> </ul>
---

- ・Wi-Fiを市全体に飛ばして、観光客を集客する
- ・思いっきり騒げて、遊べる広場を作ってほしい
- ・毎日遅刻しそうだから、踏切の待ち時間を短くしてほしい
- ・ごみの回収が面倒だから個別収集を増やしてほしい

ここでは、全員が意見形成と理由づけをすることができていた。

次の15分間では、4人のグループで意見交流を行った(共創型対話②)。安全性や緊急性など様々な視点を出し、グループで意見を一つに絞っていた。グループで話し合う中で、中学生らしい「Wi-Fiを市全体に飛ばして、観光客を集客する」や「思いっきり騒ぐことができる遊べる広場を作ってほしい」という意見もあったが、公共性(子どもから高齢者までが本当に必要としているか)や、実現性(財政面や土地の問題など)の視点から消されていった。また、3班の「ふみきりを通らなくてもよい道をつくってほしい」という話し合いでは、「踏切が頻繁に閉まる」「待ち時間が長い」「遅刻しそうになる」という理由が挙げられていた。その後、休日の視点や踏切が交通渋滞しているという新しい視点でも話し合い、「車の渋滞の解消にもつながる」という理由も付け加えられた。このように、話し合う中で、他者の意見から新しい視点に気づくことができ、お互いに納得する様子が見られた。



写真1 各グループでの共創型対話の様子

このような共創型対話②の結果、グループで意見形成したものは(図4)の通りである。

#### 【第4時 共創型対話③】

グループで作成した意見とその理由、一つに絞った視点を各グループに発表をさせた(図5)。

そして、学級全体で、グループで一つに絞った視点を共有した。そこで出された意見は図7の通りである。

その後、それらの視点をもとに各グループで意見を9つから2つに絞る作業を行わせた(共創型対話③)。絞る意見を2つにしたのは、自分のグ

1班 街灯を増やしてほしい 理由 夜が暗くて危ないから	2班 街灯を増やしたり、消えかけている電球を替えてほしい 理由 一人で帰る時こわいし、消えかけてちかちかすると余計不気味だから	3班 ふみきりを通らなくてもよい道をつくってほしい 理由 ・通学時に、踏切で止まって遅刻してしまう時があるから ・車の渋滞の解消にもつながる
4班 個別収集を増やす 理由 雑誌や缶やビン等、いちいち市役所や決まった場所にもっていかないとけないから	5班 ふくとびあ近くの田んぼに電灯をつけてほしい 理由 夜暗くて事故を起こしそうで危ないから	6班 海をきれいにしてほしい 理由 おしゃれな店があるのにもったいない
7班 福津市民運動会を開催してほしい 理由 ・子どもからお年寄りまでの交流が広がるから ・観光客を増やして福津市を盛り上げるため	8班 道路工事を減らし、学校などにお金を使う 理由 ・小学校の校舎の新しさに差があるので、もう片方の小学校をきれいにしてあげてほしい	9班 ミニバスを大きくして、バス停を増設、料金を無料に!! 理由 ・無料にしたら利用者が増えるから ・どこからでも乗れる方が良く乗れなくなる人が減るため

図4 共創型対話②で作成した各グループの10代の声

安全性	中学生の視点	不便さ
実現性	環境面	独自性
地域性	必要性	公共性
緊急性	財政面	将来性
		継続性

図5 グループで意見を一つに絞った際に出た視点

ループの意見に固執せず、他のグループの意見に目を向けさせるためである。

具体的な共創型対話③の様子を7班で説明する。7班は、共創型対話②で地域差の問題解消のために、交流行事として「合同の福津市民運動会の開催」を挙げていた。7班の生徒の考えは次の通りである。a: 市町村合併したにも関わらず、福岡地域と津屋崎地域の交流や開発の差があるという生徒、b: 福津市の将来的な問題として、高齢化を挙げ、お年寄りから子どもまで交流できる行事を考えてほしいという生徒、c: 全ての意見を客観的に考察し、新しい提案をすることができる生徒であり、d: 個人の意見形成ができたものの、理由づけの内容に説得できるものではない生徒。

7班の共創型対話③の様子は表3の通りである。

表3 7班の共創型対話③の様子

a 「1つは選択している班も多いし、緊急性もあるから、街灯で決定だね。」
b 「じゃあ、2つ目は何に絞る? 運動会かな」
d 「でも、(運動会)参加する人は少なそう」
c 「個人的には海(をきれいにしてほしい)がいい」
b 「誰がやるの?」
a 「小学生とか。(市が)海をきれいにする企画を立ててくれればいいんだよ」

c「それじゃあ、ゴミの捨てる場所を定めたらいい」  
 d「確かに。それがいいよ」  
 c「決まったゴミ箱を設置すればいい、これから捨てられるゴミが減ると思う」  
 a「じゃあ、今捨てられているゴミはどうしようか？」  
 c「だから、ゴミ拾いの時もそのゴミ箱に捨てられるね」  
 b「それ(今あるゴミをきれいにする)は定期的に誰がやるの？」  
 c「それ(ゴミを定期的にきれいにする)はそういう行事をこれから作ればいいんだよ」  
 a「よし、もう1つの意見は海をきれいにするにしよう」  
 ~発表~  
 c「街灯の設置を選んだのは、緊急性の視点を重視したからです。また、海をきれいにしてほしいという意見の場合は、ゴミが放置され、ゴミの捨てる場所がないからだと思います。なので、ゴミ箱を設置すれば、放置されるゴミが少なくなると思います。あと、交流行事を兼ねた清掃活動をすれば、私たちのグループの子どもからお年寄りまでの交流や地域間の交流が広がるというのも実現できると思います」

最後の発表では、7班は、自分たちのグループで形成した意見を選択せずに、他のグループの意見を選択し、それに自分たちの視点であった「市民全体の交流」を加えて発表していた。このことは、福津市にとって本当によいものは何かを考え、他者の意見を積極的に取り入れ、社会的な見方考え方を成長させた姿であると考えられる。

共創型対話③の後、各グループが選択した意見と選択数は次の通りである。

表4 各グループが選択した10代の声と選択数

10代の声	選択数
街灯を設置してほしい	8
海をきれいにしてほしい	4
ミニバスを大きく、バス停を増設、無料に	3
福津市民運動会を開催してほしい	2
道路工事を減らし、学校などにお金を使う	1

よって、本学級の福津市長に届ける10代の声は、選択数が多かった2つに決定した。その後、福津市長が納得する理由づけを考えさせ、各グループで発表させた。選択された意見と理由づけは以下の通りである。

<p>10代の声 街灯を増やしてほしい</p> <p>理由 ふくくとびあんの田んぼのころは街灯がなくて、夜もとても暗かだったのでその道を通らず、別の道を通ってわざわざ遠回りをしたことがあるから。</p>	<p>10代の声 海をきれいにしてほしい</p> <p>理由 定期的にしてる人もいるがそれだけでは人が足りず、現在、きれいな海になっていないので、市全体に呼びかけて清掃することができれば海がとてもきれいになると思う。きれいな海もPRは観光客を集められる。</p>
---	---

図6 学級で決定した10代の声と生徒が書いた理由づけ



写真2 授業の様子

(5) 考察

授業前のアンケートは35名中8名しか記入しておらず、地域に対する関心の薄さと意見形成の難しさを感じられた。授業後のアンケート(図7)では、社会的な事象に関心が生徒は「はい」「まあまあ」を合わせて34名であった。

① 福津市の政治に関心を持つことができましたか。(ハ)



図7 授業後アンケート①

この結果を見ると、この学習を通して福津市に対する関心が高まったと考える。

授業後の感想を見ると、共創型対話を繰り返す中で、新しい視点を加えたり、友だちと協力しながら、意見をつくり上げたりしたことがわかる。また、アンケート④(図9)でも友達と話し合うことで、社会的な見方や考え方が成長できたと実感した生徒が多くいたことがわかる。

- ・海をきれいにするには、自分でも心がけたら少しはいいんじゃないかなって思いました。
- ・友達と意見を交わす時は、自分勝手な意見ではなく、視点を踏まえて考えるといいことが分かった。
- ・私は福津市が大好きなので、その福津市がよりよくなるために私たちにできることがあるんだなと思いました。
- ・みんなで考えた意見と視点をもとに意見を絞った。協力して意見をつくることは大切だと思った。

図8 生徒の感想

④ 友だちと話し合うことで、自分の見方や考え方が成長したと実感できましたか



図9 授業後アンケート④

下記の生徒は、授業前アンケートで何も記入し

なかった生徒である。共創型対話①, ②を通して自分の意見形成(図 10)をすることができている。このように, ほとんどの生徒が社会的な見方や考え方が成長できたと考える。

### ☆ 私が考えた 10 代の声 ☆

海をきれいにしてほしい!!!

理由(視点)

福岡海岸の近くには「アム」に出るまでおしゃべり屋があるのに、私たちが海岸清掃をするのは花火大会の後だけで、海岸にはたここのゴミがあるの。そればかりをきれいに海に行けば、たここの人がおしゃべり屋のりから。

図 10 生徒による共創的対話活動前後の変化

授業後のアンケート結果②からは, この単元の学習(共創的対話活動)で, 友達の新しい一面や考え方を発見することができ, 友達の見方が変容したことがわかる。また, ③からは社会科における問題解決の方法として, グループでの話し合いが有効であったと感じている生徒が多いことがわかる。このことからグループ学習や共創的対話活動は, 人間関係の構築にも大いに役立つことがわかった。

② 友だちとの話し合いを通して, 友だちの見方が変わりましたか。(人)

24	10
はい	まあまあ

③ 問題を解決するために, グループで話し合うことは必要だと思いますか。

29	5
はい	まあまあ

図 11 授業後アンケート②③

## 5 成果と課題

### (1) 成果

単元全体を通して共創的対話活動(共創型対話①, ②, ③)を行うことで, 社会事象に対する見方や考え方が広がったり, 深まったりした(成長した)と考える。また, 生徒たちに共創型対話による協働の問題解決をさせたことは, 積極的に授業に参加するといった学習意欲の醸成につながったと考える。

毎時間にグループ活動を導入させることで, グループでの対話の仕方がわかり, 対立や受容などの人間関係を経験し, 人間関係力が育ったように感じられた。

### (2) 課題

社会的な見方や考え方をどのように評価してい

けばよいか明確にできなかった。短い単元だったために, 生徒に十分な話し合いをさせたり, 適切な資料を収集させたり調べたりする時間が不足した。今後, 対話の仕方を訓練し, 単元構成等を工夫しながら, 人間関係の構築ができる社会科学習指導を探求したい。

## 6 おわりに

本研究を通して, 単元を貫く学習課題の設定や共創的対話活動の重要性に改めて気づくことができた。また, その学習課題を毎時間生徒に意識させ, 共創的対話を進める手立てが必要であることもわかってきた。

今後の研究では, 社会的な見方や考え方の評価の仕方を明らかにし, 共創的対話活動の中で生徒のグループ内の役割の積極的な交代やプレゼンテーションを単元末に取り入れた学習などを考えていきたい。また, より人間関係の構築に役立たせるためにも, 地理的分野や歴史的分野などの単元においても, 共創的対話活動を取り入れた単元を考察していきたい。

## 主な引用・参考文献

- 深澤広明 2006 グループ活動やペア活動の成立条件 - 小集団効果を捉えなおすために - 心を育てる学級経営 NO. 260 9月号 明治図書  
 平成 24 年度研究紀要福岡教育大学附属久留米中学校 2012 社会を構築する力をはぐくむ社会科学習活動の創造 - インテグレイティブ・シンキングを取り入れた学習活動を通して - 金子奨 2008 学びをつむぐ〈協働〉が育む教室の絆 大月書店  
 北俊夫 2012 なぜ子どもに社会科を学ばせるのか 文溪堂  
 三宅美博, 上田完次 2004 共創とは何か 培風館  
 岡崎誠司 2013 見方考え方を成長させる社会科授業の創造 風間書房  
 多田孝志 2009 共に創る対話力 教育出版  
 安井俊夫 1985 学びあう歴史の授業 青木書店  
 安野功 2005 社会科授業が対話型になっていますか 明治図書  
 吉本均 1985 授業成立入門 明治図書